

2022年10月16日発行

事務所 武石地域総合センター内

TEL:0268-85-2511

<https://www.s-takeshi.jp>

印刷 中澤印刷株式会社



地域文化の伝承に向けて おねり行列練習に励む

役配人選までしたもののコロナウイルス蔓延防止のため練習が不可能となり、春の御柱当日は奉納できなかったおねり行列ですが、今練習が再開されています。

おねり保存会(廣川岩男会長)は、今回中止となると武石の大切な伝承行事が12年間行れないこととなり、伝承できなくなる恐れもあることから、この11月3日に奴衆と笛・太鼓などに規模を縮小して実施、披露することとしました。

奴の演技練習は7月から始まりましたが、コロナ第7波の急拡大により一時練習を中止せざるを

得なくなり、下火となった9月7日から漸く再開となりました。

武石総合センターコミュニティーホールに奴の皆さん、師匠などが集まり、週3日、1日2時間の練習が再開されました。9月下旬からは小中学生による小長刀、笛・太鼓の練習も始まりました。

11月3日当日は、9時武石地域総合センター前で開式・読み立てが行われ、おねり行列は9時30分出発、武石郵便局前、下武石信号、武石小学校グラウンド横、中ノ橋を經由して子檀嶺神社まで約2時間ほどの予定で行われます。

空き家バンク説明会の開催

お盆で武石に帰省されている方も多い8月14日、武石地域総合センターにおいて、市移住交流推進課主催の「信州うえだ空き家バンク説明会」が開催されました。

空き家バンクは、近年増加している空き家の利活用を促進したり空き家をつくらないために、空き家の持ち主と空き家を買いたい人、借りたい人を市が仲介する制度です。

近年武石でも空き家が増加していますが、その一方で都市部から脱出し地方で暮らしたい人も増えています。この両者をうまくマッチングできれば、持ち主は税や管理業務等の負担が軽減され、移住希望者も安心して入居できるようになります。また地域としても人口増や地域活性化に繋がります。空き家バンク制度ができてから7年間で武石地域では22件の空き家が登録され、12件

の移住が実現するなど15件の空き家活用の実績があります。しかし近年は移住希望者が急増しているため、市ではもっと登録数を増やしたいとしています。

説明会では、制度の概要のほか、実際に上本入に移住をされた方が移住体験談を語ってくれました。参加者からは「移住して不便と思うことはないか」、「一人暮らしになり将来は制度に載せたいが、登録するとすればいつがいいのか」、「登録の諸費用は」などの質問が出ていました。説明会の終了後にはさっそく登録を申請する人の姿も見られました。



余里花桃の里で景観維持活動



余里の花桃の里では、9月15日、余里シニアクラブ(成沢功会長、会員約50名)の皆さんによる草刈りが行われました。花桃の里の景観維持のため、シニアクラブでは6月と9月に花桃が植栽されている畑の草刈りを実施しています。この日は男性会員14名が参加し、一斉に草刈り機を操作し2か所の畑で2時間ほどの作業に精を出していました。

参加者の一人は「80歳を過ぎたらめっきり体力が落ちた」と言いながらも、草を刈る姿はヤングシニアに負けず、衰えを感じさせませんでした。

1年を通しての地元のこうした地道な活動があり、「日本一美しい2週間」が維持されています。来年の春も素晴らしい花桃が見られることでしょう。

地域福祉推進フォーラム 豊殿地区の実践

地域における福祉の進め方を考える、地域福祉推進フォーラムはコロナ禍で休止されていましたが、3年ぶりにサントミュージアムホールで開催され、自治会長、民生委員、福祉推進委員などが参加しました。今回は、住民が主体となって地域福祉活動を進めている上田市豊殿地区の事例が発表されました。

豊殿地域では、1990年代から、自治会長OB会などが中心となり「歳をとっても地域で安心して暮らしたい」として話し合い・活動が進められ、特養ローマンうえだやこれに併設する診療所が誘致されるという大きな成果を生みました。さらに、施設誘致だけでなく、住民が主体となった

福祉活動が重要であるとして「安心の地域づくりセミナー」活動に発展し、住民が特養でのボランティア活動を始め、統合により空いたJAの旧店舗を地域の拠り所として、お茶飲み会、将棋・囲碁、絵手紙などの住民の交流や、月1回の子ども食堂、蚤の市など様々な取り組みが行われています。また住民が年会費を負担しながらデマンド交通を運営しているなど、大変活発な住民主体の地域づくりが進められています。

当初から地域と関わってきたローマンうえだの櫻井記子さんは、「なんでも話し合っって住民が決めていく過程、意見交換が大切。話し合いが次につながっていく」と話していました。住民が、施設職員とともに地域の課題や意識を共有することで、住民主体の福祉活動が展開されていて、模範になる取り組みとして、武石地域でも参考になる点が多く見られました。

「地域福祉」にアプローチ 課題解決に向けた協議2

健康・福祉・体育部会



つくる会健康・福祉・体育部会では、7月の部会でワークショップ形式により、地域福祉課題について様々な視点から意見交換を行いました。今回9月13日の部会では、一つのテーブルを囲みながらの少数精鋭のグループ討議を行い、前回明らかにした課題を一覧表にまとめさらに深める作業を行いました。

その中では、短期で取り組むものと時間をかけて取り組んでいくものに仕分けながら課題を絞り込んでいきました。特に短期(年度内)で取り組

みたいものとして、武石診療所の医師に医療の立場から見た武石地域の医療・福祉の課題をお聴きしたいということが取り上げられました。

また長期的な課題として、個人のプライバシーという壁とどう折り合いを付けて、必要な情報を収集してそれを地域の中で共有・連携し、活用を図っていくかという「情報」の大切さについても話題になりました。

ひと昔前の武石では、近所のおばあちゃん達がそれぞれの家に集まり、お茶飲み話に花を咲かせる風景が日常的に見られ、そこで行なわれてきた隣近所での情報交換が、困ったときの助け合いという「互助」という形で自然に行なわれてきました。今はこの地域でも隣近所の付き合いが希薄になっています。「一人暮らしの高齢者が、家のどの部屋で寝ているか」などという災害時に役立つ情報も共有できていません。

まだまだ協議は始まったばかり。様々な壁にぶつかりながらも、解決策を見いだそうと取り組んでいます。「地域福祉」が抱える課題解決に向けて次回の部会でも継続して話し合いを深めていきます。

地域ケア会議の開催

武石と丸子の地域包括支援センターが共催する地域ケア会議が、9月28日(水)丸子文化会館セレスホールで開催され、地域づくりコーディネーターの立科町「まねきねこ喜多」代表の浦野千絵氏が講演しました。自治会長や民生委員とともに、つくる会健康福祉体育部会員も活動の一環として参加しました。

講演では、「暮らしやすい地域作りのためには、地域住民が健康管理など自分がすべきこと(自助)、隣近所やボランティアなどの助け合い(互助)、介護保険などの共助、行政などの福祉サービス(公助)をうまくかみ合わせる必要がある。特に互助の部分地域住民が主体的に構築していくことが暮らしやすさにつながる。」との指摘がありました。

また、浦野さんが当事者主体の地域づくりをしているとして高く評価している、武石の「つなぐ家」も事例として紹介されました。

地域の高齢化が進み、高齢単身・二人世帯が増加している中で、暮らしやすさを地域全体でつくるヒントとなる講演でした。

お知らせ

秋のおさんぽギャラリーが開かれます

武石 OSANPO GALLERY

武石
おさんぽ
ギャラリー 秋

2022年10月29日(土)30日(日)

開催時間 10:00~15:00

☆5箇所をおさんぽして巡るスタンプラリー☆

①たまりまイベント会場 ②ギャラリークラノマ
③びざらば ④ともしびの里文化堂 ⑤つなぐ家

※新型コロナウイルス感染対策のご協力お願い致します

主催 武石県土つなぎ隊

第6回 集まれ! 仮装大賞

「第6回仮装大賞」が9月18日(日)、武石地域総合センター大ホールにて開催されました。台風14号の襲来が心配されたものの天気も持ち直し、収容制限いっぱいの観衆が見守るなか8組の出演者がアイデアいっぱいのパフォーマンスを披露しました。



「お仙とかな二郎」

お仙ヶ淵を題材に一人三役
(宮下和美さん)



「三匹のこぶた」

仮装大賞常連、皆さん大きくなりました。
郵便局長賞を受賞。(おまりもさん)



「顔で日本の世界遺産」

顔の各部をモニターに映して世界遺産
を表現。見事優勝。(三井勝彦さん)



「ひまわりの一日」

自治センター職員の皆さんにより向日葵畑の一日を演出。



「4DX」

体感型劇場上映システムを
親子で体現。そのうち上田にも
登場するのでしょうか。
(チームピノキオさん)



「リンダリンダ」

顔面に付けた紙人形に息を
吹き掛け踊らせる新表現で
準優勝(荒川治久さん)



見事優勝の三井勝彦さん。
新作のアイデアは流石でした。



「オリジナル軍手イ 誕生秘話!？」

美ヶ原や武石小を
描いた
“花咲かグット”の
Tシャツも披露。
(金井鼓太郎さんほか)



「田植え」

武石も将来、スマート農業
が普及しそうです。
(武石郵便局さん)



総監督の瀧澤和広さん(武石郵便局長)は、「地域貢献で始めたこの仮装大賞。早いもので第6回を無事開催することができました。毎年約30名のボランティアスタッフが、コロナ禍で大変の中でも観客の皆さんが楽しんでもらえるよう、心を一つに一生懸命頑張ってくれました。年に一度の地域の皆さんの楽しい思い出になれば幸いです。」と話してくれました。



審査員や関係スタッフも
思い思いに仮装して登場。

第15回 たけし歴史さんぽ道

元禄八年記銘の道祖神

郷土史家 見玉卓文

鳥屋公民館の前から弥勒堂に向かう小道の脇に、大木の根っこに抱かれるようにして道祖神が祀られています。並んだ神像の上に「元禄八年」の文字が見えます。「八年」とは「八年」のことで、天と書くのは江戸時代の石造物でも時代が古いものに見られる書き方で、元禄八年は江戸時代も前半の1695年になります。

道祖神は石塔の形を舟形の光背(仏像の背後につける飾り)のよう彫り出し、その前面に像を2体並らべて彫り出す双体道祖神ですが、像は両方ともお坊さんのような姿をして合掌しています。両足をきちんとそろえてすくっと立ち、顔の表情ははっきりし、うつむきかげんで、目はやや細目、穏やかで優しい印象が受けとれます。

道祖神の石塔は、江戸時代の寛文以後(1661～)多くなりますが、この例のように、お坊さん姿、合掌、男女の区別が見られないものは比較的古い道祖神の特徴と言われますが、それより古いものでも男女の神像で、肩を組み握手しているものもあります。

長野県は道祖神の石塔が多い所で、あちこちで神像や文字碑が見られますが、造られた年月を刻まないものが大半で、多くは江戸時代の後半に作られたと考えられています。

近くで古い年号を刻む道祖神を捜してみると、上田小県地方にはなく、佐久市望月天神林の菅公社境内入口にある男女二神を彫り出した舟形石の「元禄丙子天十一月吉日」、小諸市の諸集落入口の辻にある、胸部で合掌した両手で何かを捧げているような二像の「元禄十六年六月吉日」があるぐらいです。したがって鳥屋の道祖神はととても貴重ですので上田市の文化財に指定されています。ちなみに長野県内で最も古い年号を刻むものは、辰野町沢底入の双体道祖神で、永正二年(1505)に村が造立したものです。

鳥屋の道祖神については、昭和43年の史学雑誌『信濃』につぎのようなエピソードが載っています。この道祖神は、「上野源一郎さんの奥さんのお話によると、10年ほど前、上田の宮下先生がすぐ上のモミ大木の根元に横転していたものを発見され、『道祖神だから大切にするように』と申

されたので、3メートルほど下げた現在の場所におろし、それ以後、鳥屋部落の上手の人達は上手の道祖神として祀るようになった」。また、「この像がモミの根元にあったときは、『お地藏さま』だと思っていた村の人がいた」ともあります。

宮下真澄先生は、昭和25年に発足した上田小県誌史料編さん会の主要な一員として史資料の調査に当たりましたが、とりわけ石造の文化財の調査に業績を残した方です。

道祖神はドウソジン、ドウロクジン、サイノカミ、サエノカミ、セーノカミなどと呼ばれ、いろいろな信仰が含まれていると言われます。

多くが道のかたわらに見られることから、旅の神あるいは道の神と考えている人は大勢います。また集落の入口や峠などに祀られているところから、境を守る神、悪魔を追い払う神とも言えます。正月15日(小正月)にこどもたちが道祖神のある所でドンド焼(左義長)をすることから、こどもの神様でもあります。男女二神が睦まじく肩を抱き手を握る姿に刻まれたりすることから、子孫繁栄を願い、性をかたどる石をそのまま道祖神のご神体とする所も各地に見られます。

鳥屋では数軒単位で道祖神を祀るようですが、この双体道祖神は、鳥屋峠方面から下ってきた集落の入口を意識して据えられたと思われる。



武石を盛り上げる
人々グループ紹介

武石の人々 団体



美ヶ原飛龍太鼓保存会
会長 松崎 俊幸さん

長 胴太鼓の静かな拍子で始まり、続いて法螺貝と銅鑼の音が鳴り渡ると、一斉に大・中宮太鼓の演奏が始まり、コミュニティーホールには豪壮な太鼓の響きが鳴り渡りました。美ヶ原飛龍太鼓保存会では、月曜日の夜7時から武石総合センターのコミュニティーホールで練習を行っており、訪れた日はコロナ禍で久しぶりの練習との事でしたが12人の会員が集まり、2時間程の練習に汗を流しました。



保存会の皆さん

現在、保存会は10代から70代まで老若男女のメンバー20人で構成し、武石地域で行う夏祭り、ともしびの里芸術祭、美しの湯祭りなどでの演奏、また上田城跡公園で行われる千本桜祭り、太鼓祭りなどでの演奏を合わせて年間5～6回の演奏活動を行っています。しかし、この所のコロナ禍で多くのイベントが中止となってしまい、演奏の機会が減少しています。

美ヶ原飛龍太鼓は、平成元年(1989)の武石村制100周年記念事業の一環として創設、祭り太鼓一式、その他法被などを揃えると共に、太鼓の打ち手が募集されました。平成元年2月、集まった打ち手36人により保存会を結成、太鼓演奏の指導を諏訪神太鼓伝承保存会の柳澤忠範先生と会員の方々をお願いして練習を開始しました。当初から保存会のメンバーだった松崎さん(現会長)は、「太鼓の演奏は初めてで難しかった。しかも大勢で演奏するので、全員の息を合わせて一曲目を完成させるのにとっても苦労した。全く余裕がなかった」と創設当時を話していました。

その後、練習や演奏発表の機会を積み重ね、平成元年11月の武石村制100周年記念の式典初日には、来場者を前に美ヶ原飛龍太鼓が華々しく披露されました。

太鼓演奏の曲目は、現在8曲あり、その内「^{ともしび}灯」という曲は松崎さんと会員皆さんで練り上げた創作曲です。美ヶ原飛龍太鼓の特徴は、「相打ち」という演奏技法を取り入れている事で、二人で身をかかわしながら一つの太鼓を打ちあう所作は見応えがあり、近隣では評判となっています。

保存会結成から33年、この間の活動を振り返り松崎さんは、「武石だけでなく、東京の練馬区や明治神宮外苑、松本の信州博など色々な所で演奏ができて楽しかった」、「平成16年(2004)には美ヶ原飛龍太鼓15周年記念コンサートを開催、多くの人達に楽しんでもらったことが嬉しかった」と話していました。



平成5年(1993)9月 松本信州博アルプスステージ

保存会では、後継者不足が大きな課題となっています。「演奏技術の伝承のため、中高生から社会人まで若い皆さんの参加を是非お願いします」との事でした。

今年11月3日(文化の日)、御柱おねり行列に合わせて子檀嶺神社鳥居前で太鼓演奏を行う予定です。太鼓の響きと演奏の妙技をお楽しみ下さい。

- ・太鼓に興味のある方、打ってみたいと思う方は下記までご連絡下さい。
松崎会長 090-3565-5815
- ・月曜日、夜7時から練習を行っていますので、自由に見に来て下さい。